

大／阪／の／建／築／まちあるき——「東大阪」

つはらじんじゃ 津原神社



玉串の石鳥居



拝殿



左 石鳥居の刻印
右 「津原の池」の碑

所在地： 東大阪市内花園本町 1-4-23
最寄駅： 近鉄奈良線河内花園駅より徒歩 5 分
出典： 「津原神社の由緒」津原神社
参考： 東大阪市教育局資料 他

近鉄奈良線花園駅を南へ約300mの位置に小学校・住宅に囲まれ樹木が茂る津原神社がある。

(江戸時代には玉串明神とも称されていた)

津原神社を中心とした玉櫛之荘(七村)は同神社の祖神天玉櫛彦之命が太古、此の地方に荒ぶる凶賊を鎮圧された功により天朝から所領として賜り、其の子孫が長く之を治めたと古い歴史に伝えられている。

平野区旭神社文書に伝承として以下の記述がある。天平勝宝六年(西暦780年)当河内郡一帯は風雨が激しく各所に水害が続出し村人は困窮したがこれを救う手立てもなく天候の回復を祈るばかりだった。その時に加美村の八幡宮の祀部に神託があり「大和川の上流より橋の枝と櫛笥(化粧道具を入れる箱)を流し、その櫛笥の流れ止まる所に神を祀つたなれば風水の禍は自ら治まるであろう……」とあったので大和と河内の国境より流したところ、柏原附近で櫛笥は北へ橋は西へと分れ櫛笥が津原の池の溝みに流れついて止つた所が現在の津原神社の位置にあたりそれを流した川を玉串川と呼ぶようになった。櫛笥が流れつた所の村人が相談し池の傍に社を建て天見屋根命並びに玉櫛之荘の祖神天玉櫛彦之命・天玉櫛命を併せて祀つたところ風雨が治まり以来池一帯は激しい風水害を蒙ることがなくなり津原神社はこの地の総社として尊崇をまつることとなった。

また今本殿の北側には津原の池があり日照りの時には雨乞いをして池の水を田んぼに汲み出したと伝えられている。

津原神社より南へ約600mの位置に石の鳥居がある。本殿からこの玉串の鳥居までを馬場と呼び「河内の三大馬場」のひとつとされ六丁の長さの両側には老松、大杉、榎の巨木の並木が続いていた。鳥居の右柱部に「奉寄進 石鳥居」左には「元禄十二 巳卯年(西暦1699年)十一月廿四日 玉櫛荘 市場村」と刻まれており、額には「玉串惣社」と記されている。

鳥居柱部に刻まれた市場村という村名は古くから玉串川で水運が発達し市を開き交易が盛んなことからこの村名になったと思われる。

境内入口の右側に「式内 津原神社」と刻まれた石碑が建っているがこの式内とは延長五年(西暦927年)大宝律令の事務細則として延喜式が定められその中の神名帳に記された神社を式内社と称し東大阪市内には河内国一の宮 枚岡神社(建築人H20年9月号参照)をはじめ16社がある。(今西圭司)